

僕は、人の腕が好きだ。

そういえば少しおかしく聞こえるかもしれないけれど、他の人たちが言っている、「推し」だとか「ファン」とかとさして変わらない。ただ人より人の腕と手が好きなだけ。もちろん僕は小・中とクソつまらない道徳を受けたわけだし、人間としての倫理観はきちんと持ち合わせている。だから今から話すことは刺激に飢えた人向けの、例えば誰かの腕を切って収集するような、話ではない。ただの僕の思い出話。

高二の七月一日。湿気で自分の長めの前髪が額に貼り付き、三か月くらい切っていないと、髪をいじっていたあのとき。ある腕が僕の下へやってきた。

腕の持ち主は黒板に『上野 冬胡』と丸い字で書き、「うえのとうこ、と言います。愛媛から来ました」と言った。愛媛ってどこだっけ、四国か？ 定かでない地理の記憶を引っ張り出しながら、ゆるゆると転校生の顔を見た。頭の上の方に結んでいるポニーテイルが揺れる。少しドキドキしながら新しい腕を見る。半袖の白いセーラー服から伸びる彼女の腕がはつきりと見えた。

あれは、綺麗すぎる。

自己紹介によると特に運動していたわけではないら

しい。が、筋肉の付き方が恐ろしく綺麗だ。筋肉はどのようなトレーニングをするかというのも大事だが、生まれつきの配列や、質が美しいかがその後の人生全てを左右している。その点、上野は僕が今まで見た中で一番だ。人間の持ちうる限りの特別なところだけを凝縮してできた腕だ。腕から掌にかけての関節の繋がり、皮膚の皺の一つ一つまでも全てが僕の求めていたものだ。僕が今まで見てきた中でも、想像してきた中でさえもあの腕を超えられるようなものは見当たらない。間近で見たい。今すぐ、走って彼女の腕を見て触って聞きたい。僕が彼女に全神経を注いでいると、担任が仰々しく言い始めた。

「上野さんの右手の小指の先は先天的に欠損しています。日常生活に支障はないですが、皆さん気を付けるように」

上野は先生の言葉に合わせて自分の右手を掲げた。さっきまでほかの四本の指に隠されていた小指が見え始める。本当に、指先がない。ない。どこにも。爪があるはずの場所がなくなっている。周りのみんなはざわざわ騒ぎだす。でもその声は耳の手前で掻き消されて、僕はとにかく自分の視界を疑いまくった。何度見返しても、無い。途端にフツと体から力が抜けた。先天的ではどうしようもない。いや、後天的でもどうもできないけど。やっぱり完璧なものなんてこの世にな

いのだ。軽いため息をついて、馬鹿みたいに晴れた外を眺める。空にはぼんやりと雲が数個、浮かんでいた。先生は開いている席を指でさし、上野を座らせた。僕の隣に来るなんて小女漫画的なことはなく、前列の右端に行った。僕はちょうどその列の後ろの方に座っていたから、ずっと腕を見ていられた。綺麗だった。その言葉で表しきれないくらい。

それから二週間。上野のせいで碌に授業に集中できなくて、期末テストは散々だった。晴れているのに、廊下はどんより暗く見える。道路に張り付くガムみたいな重い身体で校舎の端まで歩き、部室である美術室のドアを開けた。油絵具とほんの少しのプラスチックが混ざった変な匂い。校舎の隅っこにべったりと張り付いて校舎ですよって振りをしているくせに、その匂いがここから別の世界ってことを示しているみたいだ。この匂いが僕の嗜好を許してくれている気がして好きだった。しつれーします、と目立たないように小さな声で部屋に入った。

「村上君っ」

部員にしては元氣すぎて高すぎる声が僕の苗字を呼んだ。耳をつんざくような女子特有の高い声でウツと呻きかける。声を出したやつの腕を見るとやつぱり上野の腕だった。何故彼女がここに来たのだろう。確か、彼女は転校前と同じく、華道部に入っていたはず。そ

れに、この人はコミュ力が高くて、友達も多い。転校生のくせに既に僕の三十倍は友達がいる。ゼロに何をかけてもゼロだけれど。そんな彼女がこんな陰気な部屋に来る理由が思い当たらない。僕がオドオドしていると上野は僕にずっと近づくと近づく。

「村上君って美術部だよ。私の手、描いてよ」

上野が右腕を僕の前にさし出した。完璧な腕と掌と四本の指と、肌色の粘土で作ったような歪な一つ。近くで見るとアレ以外とても美しく感じた。僕は産まれて初めて描いてみたいと思った。今の今までゆったり血液を送り出していた筈の心臓が、馬鹿みたいに鼓動を早める。頭の奥の血管が興奮で膨らんでズキズキ痛む。

「ねえ？」

上野がぼかんと僕の方を見ている。腕は僕の前にかざしたままだ。

「描くよ。僕が、描くよ」

僕の口は勝手にそう言っていた。

「やった！ ありがとう！」

上野は小さく飛び跳ねた。まるでただの明るい高校生みたい。

勝手に声を出すなよ、いや書くけどさ。頭の中で自分の口に文句を言いながら部屋の後ろに乱雑に置いてある少し高めスケッチブックをとる。美術部に入部

してから百均で買った七十枚綴りのばつかり使っていて、一度も使っていないかった。でも、描きたいものが見つからなかったし仕方ないだろう。そう考えることにしておこう。埃を被って少し汚れた鶯色の表紙を開く。一番初めのページは日焼けもしてなくて真白い。

「上野、さん？ こっち、来て」

近くの椅子を引き、上野を呼ぶ。こういうときは上野と呼び捨てたほうがいいのか。いや下の名前にさんづけ。上野はフツと僕を鼻で笑って、首を傾けた。

「今から描くの？ 私はいいけど。美術部ってもう少しで展示会、なかったっけ？」

「えーっと、それは、もう描いたから、大丈夫」

嘘だけど、これは方便というやつだ。上野は少し怪訝な顔をして僕の隣の席に座った。

「じゃ、ここにこうやって、腕置いて……」

上野の見本になるように自分の腕を置く。もちろん、ちようど小指が見えないように。上野もそれ見ながら机の上に腕を置いた。でも、何故か不服そうな顔をして、これじゃやだ、と。そして手を見つめながら

「私の小指が見えないじゃん」

と言った。意味が分からなかった。何故彼女がそんなものを描かせたがるのか、僕には理解出来なかった。画像加工で汚いものを見えなくするのは当たり前だし、それが花の女子高生と言うならば、その傾向は顕著な

はずだ。嫌だと言いたかったけれど、上野の機嫌を損ねて、腕が描けなくなるのはもつと嫌だった。黙って少し震える手で上野の腕に触れ、角度を変えた。上野の腕は脂肪の下に筋肉が感じられた。思ったよりも細かった。

「なんで？」

僕の口がそうぼろっと音を発した。自分の口すらうまく制御できない自分を呪った。

「何がなんで、なの？」

上野はふふっと笑ってそう聞いてきた。ここまできたら僕も腹を括ってやろう。上野の後ろの壁を見ながら僕は言った。

「なんで、小指を、描いてほしいのになって、思ってた……」

上野は驚いた顔をして、それから少し悲しそうな顔をして窓の外を眺めた。げんなりするほど明るく晴れた空の下では、サッカー部がボールを追いかけている。「私は誰かに。他でもない、君に……。ううん、なんでもない」

上野はいつもどおりの顔に戻った。ニコニコしながら彼女は言葉が続ける。

「村上君は私の小指、どう思う？」

僕はぎよっとした。まず、女子と会話を続けられたということに。そして、そんな質問を投げられたこと

に。欠陥だ、そう答えたかったけれど、さすがに失礼だと思つた。僕が答えあぐねていると上野はアハハと高い声で笑つた。

「難しい質問だつたね。ごめん。忘れて」

まるで僕を馬鹿にしているような笑いだ。少しむつとしながら普通よりも鋭く尖らせた鉛筆を部活用の筆箱から取り出す。これは一本五百円もする鉛筆で、特別な時にしか使わないと決めている。つまりこの鉛筆は初めて使う。六角形の角が心地よく手に吸い付く。さすが、五百円もしただけある。まずスケッチブックに上野の腕と手の概形を描いた。上野は紙の上の三角と、四角と、楕円で表現された自分の腕をしげしげと見つめながらヘラツと笑っていた。

「村上君はさ、その、障害者についてどう思う？」

また重い質問をしてきた。シャツ、シャツと小気味よく鉛筆を動かしながら、僕はそれっぽい答えを考えた。

「さあ。でも可哀そう、だとは思ふよ」

上野は小さく何回か頷いて、唇を尖らせた。

「なんでそう思うのさ。可哀そうなんて簡単に言っちゃあいけないよ？ ワトソン君？」

チツチツと指を立てながら上野は高飛車に言つた。

僕が眉を寄せと上野を見ると、上野はにこりと笑う。

「なーんてね。可哀そうだよ。ホントに。可哀そう」

上野は器用に左手だけでバッグから本を取り出して読みだした。

そろそろ肩と首が痛くなってきたころ、上野は本からふと目を離して、スケッチブックをのぞき込む。

「小指は丸だけで描くん」

上野はスケッチを見ながら感心したように言う。確かにほかの指は四角や三角を使って書き込みも多い感じだけど、小指は丸でほんの少し描いてあるだけだ。

上野に言われるまで気が付かなかった。

「こんな小指、初めて描くから、描き方が分かんない。もう少し、観察しないと」

描き方が分かんないなんてそんな適当なことあるわけがない。僕はこう見えて美術部だし、一般の人より絵が上手い。見たものをそのまま紙の上に写し取るなんて容易いことだ。描こうと思えば描ける。だけど、やっぱり描きたくない。あそこにちよこんと存在する肉塊。あれだけの長さならきつと本来の半分くらいしか役割を果たしていないだろう。あの肉の存在意義はなんだ。そんな疑問が頭を駆け回って上手く絵に集中できない。ふと、上野のあの質問が蘇ってきた。僕は、今、上野の小指をどう思っているのだろう。欠陥、失敗、間違い、短所……いろんな言葉が頭に浮かんで消えていく。今まで幾度となく腕を描いた、手を描いた、小指を描いた。なのに、僕は小指の少しが欠けた

だけでそれを美しいと思えなくなるのだろうか。なんだか今までの人生が否定されたような気がした。

「触ってみる？」

上野は唐突にそう聞いてきた。僕は急に問われてしどろもどろになりながら、触りたい、と答えた。僕が誰かの手を触るのは専ら自分のものだけだったし、上野の腕はさつき触ったけれど、それと小指を触るのは全くの別物だし。上野は何のためらいもなく自分の右手を差し出してきた。無意識に僕は両手で上野の小指を握っていた。推しを目の前にした限界オタクみたいな反応をしてしまつて、かなり恥ずかしい。触つてみると上野の指はびっくりするくらい柔らかかった。指らしいところには骨がなく、本当に肉塊が皮膚に包まれているだけだった。こんな指が存在するのだと初めて知った。初めて僕の中で小指の位置に付属した肉塊が上野の小指として認識された。

チャイムが鳴り、帰宅しましょうと間延びした放送が流れた。そんな時間はたっていない気がしてたのになんだけども長かったようにも感じる。ぐいつと上野は背伸びをして、僕のほうを向いた。まだ絵が完成しないことを伝えないと。

「あ、まだ、絵完成してないから……」

「明日の放課後も、ここにくればいいんだね？」  
彼女は嬉しそうに笑つて、またね、と美術室を出て

いった。僕もリュックに入っているノートや単語帳をサブバックに移して、スケッチブックを丁寧にカバンに入れて帰路につく。途端に脳裏に鮮明に灼きついた上野の手が思い出された。やけに僕の脳は上野の小指をクローズアップしている。ぶんぶん頭を振つてもそれは離れていかない。女子に初めて触れたからかもしれない。思春期というものは厄介だ。生徒玄関を出ると、まだ沈んでない太陽が僕をじりじりと焦がす。チリンチリンと背後でベルが鳴った。僕が慌てて道路の端によけると、目の前を自転車か二列や三列で走り去つていく。道路交通法違反だ。だからイマドキの高校生は……。そこまで考えて、僕もイマドキの高校生だったことに気がついた。溶けそうな体を引きずって、日陰を探しながら歩く。上野は今頃どうしているのだろうか。部活終わりの友達に、あの小指だけがない右手を振つて、自転車のハンドルを握り、二列とか三列になつて帰路についているのだろうか。きつと左手よりも右手の握力が弱くて、自転車の前輪のブレーキは普通の人よりも利きが悪いだろう。ふと、僕は自分の右腕を見た。そこには確かに五本の指がある。上野の小指に思考を乗っ取られているのがなんだか嫌で、自分の指をグニグニ曲げてみた。

「痛ッ」

気がつくくと、折れそうなほど小指を曲げていた。あ

わてて小指から左手を離す。骨がないから、きつと上野は右手の小指を骨折したことはない。後ろから笑って走ってくる小学生の集団に抜かされた。考えていると足が遅くなるみたいだ。ペットボトルのお茶を呷り太陽を睨んだ。

やつと着いた家のドアを開け、自分の部屋に入る。買ってもらってから物置としてしか使っていない勉強机を見て軽いため息を吐く。何年も前のプリントや教科書が地層みたいになっていて、ここから何か発掘できそうな気がする。でも、そんな地質学者のまねごとをしている暇はない。のつていたものを床に落とすてなんとかスケッチブックを広げられるだけのスペースを作り出した。ガタガタと音を立てながら落ちるモノたちを見ながら、部屋を片付けろなんて、またお母さんから怒られるなあと思った。まあ今は腕の方が先。丁寧にスケッチブックを置いて例の鉛筆を出す。未完成のままでもよく鉛筆を滑らせるのを待っている。それに応えるように、鉛筆を紙の上に乗せた。自然と鉛筆が滑り、まるで僕が絵に描かれているようだった。そこからはあまり覚えてない。気がつくと朝だった。朝日を浴びながら、英語の予習をしていないことを思い出す。

「あーあ……」

僕のぼやきは夏の朝特有のぬるい空気に飲み込まれ

ていった。

その日の英語はなんとか乗り切り、へとへとになりながらも部屋に行けた。そこにはもう上野が前と同じところと同じ姿勢で座っていて、笑っていた。遅くなつてごめん、と謝りながら椅子を引きスケッチブックを開いた。

「英語の課題のことで怒られてたんでしょ？ 松田セーにして、面白いからねー」

「にししと笑いながら、上野は僕のスケッチブックを覗く。」

「昨日より、進んでない？」

三大欲求の二つを置き去りにするほど上野の手に夢中になっていたのでバレたくなくて。別に、と自然にそつげなく答えられた、と思う。ふーんと意味あり気に上野は呟いた。バレたかと思つたけど、上野はそれ以上追及しなかった。

昨日あんなに苦戦していた小指も今日はなんだかさんなりと描けた。どうやったら描けるかあんな悩んだのに、時間が無駄だったみたいだ。

「なんで私が手、描いてって言ったと思う？」

二時間ぐらい描いたとき、上野は唐突にそう聞いてきた。顔を上げ、上野の方を見る。ニヤニヤ笑つて、いたずらっ子みたいだ。

「その腕は、綺麗だから」

とつさにそう答えた。キモいって思われた。絶対に恐る恐る上野の顔を見ると、上野は驚いたような嬉しいような顔をして、喉の奥でクツクツと笑った。いたたまれなくなつて僕はまた視線を落として、スケッチに戻った。上野は綺麗か……と吹き、少しの間、その言葉を味わっていた。

「村上君」

そう言つて、上野は机の上に置いていた自分の右腕をさつと引く。描く対象を失つた僕は顔を上野に向けてざるを得ない。

「村上君は、私の小指、どう思う？」

上野は僕を見ず、自分の右手を見つめながら言う。遠くの方で野球部の歓声が響いていた。

「綺麗？ 障害？ 醜い？」

上野は畳み掛けるように僕に喋りかける。上野の視線は一切動かさず、手も微動だにしない。僕は自分のスケッチにまた目を落とす。完璧な腕と掌と四本の指と、小指。僕にとつての。

「それより、なんで腕を描いてつて言った？」

苦し紛れに話を逸らす。上野は小さく息を吸つて吐く。その音がよく聞こえた。

「私の小指に義指がはまるから」

まっすぐ正面を見て、はっきりと言つた。

「お母さんがね、『そんな指より義指を付けた方がいい

いと思うの』って言つてきて、私はそんなのいいって言つただけだ」

上野の手が微かに震えている。

「上野、さんは義指、付けたくないの」

「付けたくない、って言つたら付けなくても良いの？ ねえ？」

ぐわんと顔をこつちに向け、上野は僕の目を射抜くようにみつめた。開け放つた窓から風が申し訳なさそうに入ってくる。

「指がないからつて可哀想だと思う？ 普通に見られることが喜び？ 普通の指つて何？ これは私の、私だけの指なの！」

僕は上野に対してなにも答えられなくて黙っている。ふいつと上野は僕から顔を逸らして、手を自分の顔の上に掲げた。顔に手のシルエットが薄く映る。

「私はこの指が好き。他の誰も持つていなくて、私だけの特別。だから普通にしたいだなんて思わないで。私はそう思つていないから。これからもそう思わないから」

誰に言つているのかもわからない、自分に言い聞かせているのかもしれないような言葉を上野は呟いた。彼女の前髪が微かに揺れる。

「ごめん。お花摘みに行くてくる」

さつと上野は手を下ろすと、ニコニコと僕を見た。

若干目元が赤い気がする。それより何で花を摘みに行くんだ。愛媛では突然花を摘みに行く文化でもあるのか？ それに明日から義指をつけるなら今日中に描き上げなきゃいけないんじゃないのか？ 疑問が大量に浮かんでくる。まあ聞くのもめんどくさいし、どうでもいいや。ほぼ完成しているスケッチを見ながら僕は言う。

「この高校の花壇は校舎前にしかないよ」

上野はそれを聞いて大笑いした。

「村上君、彼女いたことないでしょ」

僕は閉口する。事実だからだ。

上野は十分ほどして戻ってきた。特にその手には花が握られてなくて、びっくりした。花は？ と聞くと上野はまた笑い出した。ひいひい言いながら、良い花がなかったの、と答えた。何でそんな笑われなければいけないんだ。僕は笑う上野から顔を背けて、スケッチブックに目を向ける。普通の指よりずいぶんと皺のない小指もしっかり描けた。手相の占い師がこの絵を見てもたぶん上野の運勢を占えるくらいしっかりと描けている。

「あとどれくらいで完成する？」

上野は急かすように僕に聞いてきた。本当はあと十五分もあれば完成する。だけど、何故かそれを上野に伝える言葉ではなく、判らない、とぶつきらぼうな言

葉が飛び出した。そっか。上野はどこか感傷的な声でそう言つて、また座り直した。別に僕は上野に彼女の小指に夢中になつてゐることに気づかれようかどうかでもよかつた。ただ、この時間が一生、それ以上に続けばいいと思つた。けど、どうせ僕の腕や眼球、体全身はいつものより早く早く動かし、それが一時停止することはない。だから僕の目算通り十五分後、それよりも早く絶対完成する。

ああ、秒針が鳴る。

完成した絵を見て上野は満足気に笑つた。

「この絵、持つて帰る？」

不満気に聞こえないように、この絵に対して何も思つていないように僕は言つた。上野は顎に手を当ててテンプレな格好で二分ほど悩む。おもむろに上野はスケッチブックを手に取つて、まじまじと眺めた。そして何か決めたように、僕を見る。

「持つてて、捨てていいから」

そう言つて僕にスケッチブックを押し付ける。上野は自分の荷物を拾い下げて、ドアの前まで行くと、くるりと僕のほうを振り返つた。

「村上君は、私の小指、どう思う？」

一音一音はつきりとした口調だった。



「上野さんらしい小指だと思う」

僕もはつきりとした口調で答える。それを聞くと上野は振り返って、ドアを開けた。

「その絵、大事にしてよ」

僕を指さしながらそう言い残して上野は美術室を出て行った。

次の日には上野の手には小指が生えていた。上野の指の感じによく似ていたけど、やっぱり、違った。もうアレは僕が知っている腕じゃない。もう上野は上野じゃない。

美術室に行っても、もうあの日のように部員にしては高すぎて明るすぎる声で僕の名前は呼ばれないし、あの腕が定位置で僕を待っていることも無い。

でも、小指のない上野の手をいつまでも鮮明に思い出せるのは世界できっと僕だけだ。